

## エ—⑤ 平成 27 年度完了報告書

2. 事業の概要と成果	
(1) 上位目標の達成度	<p>「難民キャンプの住民が読書推進活動を通じて、ライフスキルを身に着けるための知識と技術を習得している」ことを上位目標として事業を実施した。コミュニティ図書館のサービスの向上、学校やコミュニティでの読書環境の整備を通して、難民キャンプの住民の図書へのアクセスが改善し、読書を通じた知識、技術の習得に貢献した。事業期間内に延べ 412,486 人が 21 館のコミュニティ図書館を利用し、さらに、研修を受けた教員 235 人、青年ボランティア 167 人が、180 校の学校、70 カ所のキャンプ内地区等で読書推進を行った結果、学生や地域住民の読書を通じた学習、情報収集の機会が増え、知識や技術の習得に繋がった。</p>
(2) 事業内容	<p>(ア) コミュニティへの図書サービス活動</p> <p>2016 年 4 月から 2017 年 3 月にかけて、計 28,212 冊の成人向け図書をミャンマーから購入し、カレン系難民キャンプ 7 カ所にある 21 館の図書館に供与した。図書館 1 館あたり、ミャンマー国内のニュース（カレン語・ビルマ語）、雑誌、小説等を含む 110 冊以上の出版物を毎月配布した。また、2017 年 1 月に子ども向けのタイ絵本 10 タイトル、計 1,280 冊を購入し、カレン語、ビルマ語の翻訳シールを貼り付けて、各図書館に配布した。</p> <p>2016 年 9 月、10 月には、図書館員を対象に図書館サービスの改善を目指した研修会を実施した。参加者はおはなし巻物、エプロンシアターを使ったおはなしの実践方法や、おはなし会の手法、図書館活動の記録方法、報告書の書き方、図書館の規則などを学び、研修で身に着けた知識や技術を、その後の図書館サービスに活用した。</p> <p>難民キャンプ住民の図書へのアクセスの拡充を目指し、図書館から遠い地域に住む住民へ向けて、70 カ所の地域対象に、移動図書箱の配布を行った。これらの地域では、移動図書箱配布後、図書館青年ボランティアによる、図書を利用した読書推進活動を実施した。</p> <p>2016 年 6 月、9 月、2017 年 3 月には四半期会議を、2016 年 12 月には年次会議を、2017 年 1 月には計画会議を、各難民キャンプで実施した。図書館事業に関わる教育部会、図書館委員会、図書館員、学校教員、青年ボランティアなどが参加し、事業の進捗状況や成果、今後の改善策について協議した。また、四半期、年次会議の際に、図書館関係者から、多岐にわたる図書館サービスの改善点が提案さ</p>

	<p>れた。</p> <p>(イ) 学校教育の質の改善活動</p> <p>2016 年 6 月、7 月には、学校教員を対象とした図書活用研修会をカレン系、カレニー系難民キャンプを含む 9 ヲ所で実施した。保育所、小学校、中・高等学校・ポスト高等学校（高等学校卒業後に入る高等教育機関）の教員を対象とし、読み聞かせの実践方法、移動図書箱の利用方法、学校教育における図書の活用方法等について学び、さらに、教員間で、学校での図書活用事例について紹介した。これらの図書活用事例については、事業 2 年目に予定している図書利用手引きに反映させる予定である。</p> <p>学校教育における補助教材として使用可能な学習参考書を、ミャンマー、タイ国内から購入し、カレン系、カレニー系キャンプを含む 9 ヲ所の難民キャンプに供与した。2 ヲ所のカレニー系難民キャンプへは、これらの難民キャンプで教育支援活動を実施しているイエスズ難民奉仕団（Jusuit Refugee Service/JRS）を通して供与した。</p> <p>カレン系難民キャンプ内の 28 校の学校で、学校図書室の設備改善活動を実施した。設備改善に当たっては、事前に各学校の図書室を調査した上で改善対象となる学校を選定し、本棚や机といった家具の製作や図書の配架等を行った。</p> <p>(ウ) 青年による読書推進活動の実施</p> <p>2016 年 5 月、6 月に、各難民キャンプで青年ボランティアを対象とした育成研修会を実施した。研修会では、読み聞かせや人形劇、アイスブレーキングなどの手法を学び、実演も取り入れて、より実践的な知識の習得や技能の向上を図った。</p> <p>研修後、青年ボランティアによる様々な読書推進活動が行われた。2016 年 6～7 月、9～10 月には、学校等で人形劇を含めたキャラバン公演が実施し、2016 年 11 月には、難民子ども文化祭がウンピラム難民キャンプで開催され、図書館青年ボランティアが文化祭の中心的な役割を担った。また、2016 年 7 月以降、移動図書箱を配布した難民キャンプ内地区で、青年ボランティアによる週末の読み聞かせ活動を実施した。</p>
(3) 達成された成果	(ア) コミュニティ全体において図書サービスが改善されている。

### 1-1. コミュニティ図書館への図書供与

2016 年 4 月から 2017 年 3 月までに、28, 121 冊の成人向け図書を購入し、21 館の図書館に配架した。また、子ども向けのタイの絵本を 1, 280 冊購入し、カレン語、ビルマ語の翻訳シールを貼り付け、各図書館に配架した。この事業期間の図書館利用者は、延べ 412, 486 人であった（大人：153, 630 人、18 歳未満の子ども：258, 856 人）。各図書館の周辺に住む住民計 232 人へ聞き取り調査を行った結果、すべての住民（100%）から図書館の蔵書は住民のニーズに合致しているという回答を得た。また、21 館の図書館の観察調査の結果、図書の登録、図書の分類、図書の清掃、本棚での展示状況、利用者への貸出記録、移動図書箱の貸出記録において、21 館すべての図書館（100%）で図書が適切に管理されていることを確認した。

### 1-2. 図書サービスの改善を目指した研修会の実施

2016 年 9 月から 10 月にかけて、図書館員を対象に図書サービス改善研修会を実施した。この研修会には、7 カ所の難民キャンプ合計で 49 名の図書館員が参加し、計画した人数（50 名）の 98%の参加があった。研修会後の習得度について質問紙調査を実施した結果、参加者の 84%が図書館サービスに関わる知識と技術を得ていることが分かった。参加者は、おはなし巻物、エプロンシアターを使ったおはなしの実践方法や、おはなし会の手法、図書館活動の記録方法、報告書の書き方、図書館の規則などを学んだが、おはなし巻物やエプロンの使い方への理解度が高い参加者ほど、おはなし会やその他ゲーム実践方法に対する理解度も高かった。また、図書館活動の記録・報告書の書き方に関しては、研修前、特に経験の浅い（6 カ月未満）図書館員の理解度が低かったが、研修を通して、他の図書館員と同等の理解度を最終的には得られた。研修実施後のモニタリングでは、図書館員の交代があったものの、研修に参加した図書館員については、図書サービスを適切に実施していた。

### 1-3. 住民を対象にした移動図書箱配布活動

図書館から離れた地域に住む住人を対象とした移動図書箱は、70 カ所の対象地域に向けて（メラ 12 カ所、ウンピラム 16 カ所、ヌポ 17 カ所、メラマルアン 5 カ所、メラウ 10 カ所、タムヒン 5 カ所、バンドンヤン 5 カ所）、44 箱を配布した。（ウンピラム難民キャンプ、ヌポ難民キャンプの 26 箱については、前年に配布済み）

#### 1-4. 計画、四半期、年次会議の開催

2016年6月、9月、2017年3月には四半期会議を、2016年12月には年次会議を、2017年1月には計画会議を、各難民キャンプで実施した。図書館事業に関わる教育部会、図書館委員会、図書館員、学校教員、青年ボランティアなどが参加し、事業の進捗状況や成果、今後の改善策について協議した。7カ所の難民キャンプ合計で、四半期会議には、180人(2016年6月)、160人(2016年9月)、160人(2017年3月)、年次会議には、260人、計画会議には、140人の図書館関係者が参加した。当初、すべての難民キャンプで同数の参加者を見込んで計画を立てていたが、各難民キャンプの図書館数に応じて図書館関係者数も異なるため、事業期間中に参加者の見直しを行った。そのため、図書館数の少ないヌポ、バンドンヤン、タムヒン難民キャンプでは、四半期会議については、当初の計画よりも少ない参加者数となった。その結果、会議への参加者数合計は、当初予定していた人数(各四半期会議210人、年次会議280人、計画会議140人)よりも少なくなったが(参加率:四半期会議79%、年次会議93%、計画会議100%)、この点は、事業2年目の計画に反映した。

四半期会議、年次会議では、7カ所の難民キャンプで、計270の図書館改善提案があった。会議の中で、ワークショップ形式で参加者全員と話し合うことにより、多くの改善案を得ることができた。多く挙げた提案は、カレン語図書の増加、情報掲示板の頻繁な更新、高齢者や障がい者を考慮した図書館へのアクセスの改善、図書館環境の整備、児童サービスの多様化、図書館青年ボランティアを含む図書館関係者への研修の強化、パソコン研修の実施、そして、将来の難民帰還を見据えたカレン教育局(Karen Education Department/KED)との連携強化やカレン州での図書館活動実施準備であった。これらの提案への対応を含め、引き続き、図書館サービスの改善を実施していく予定である。

上記の活動を通して、図書館サービスの質が向上すると同時に、図書館の周辺の住民だけでなく、子どもから大人までコミュニティ全体の住民が、彼らのニーズに合った種類豊富な図書へアクセスできるようになった。これは、SDGsターゲットの4-6にある識字能力の向上に加え、各人の関心にあった読書を通して、ターゲット4-7に

あるように、あらゆる学習者が、持続可能な開発を促進するために必要な知識や技能を習得することに繋がった。

(イ) 教育の質を改善するための補助教材や学習参考書を活用する環境が整備されている。

#### 2-1. 学校教員を対象にした図書活用研修会の実施

7 月に実施した学校教員を対象とした研修会では、当初計画していた参加人数（240 人）の 98%である 235 人の教員が参加した。研修後に実施した質問紙調査では、研修会参加者の 74.5%が研修を通じて知識と技術を得ていることがわかった。しかしながら、指標となる 80%には満たなかった。

同上の質問紙調査の結果によると、理解度がキャンプによってばらつきがあった。参加者の 80%以上が知識や技術を習得したと見られる難民キャンプがある一方で、最も規模の大きいメラ難民キャンプでは、参加者の 57%が知識や技術を習得したと回答を得た。次に低い値が出たキャンプはバンドンヤン難民キャンプの 68%であった。

これに関して、上記 2 つの難民キャンプでは、参加者の 70%以上が 25 歳以下の教員であることが分かった。その他のキャンプでは、参加者全体に占める 25 歳以下の参加者の人数が 50%以下なのに対して、高い値が示された。このような若い教員には、教員 1~2 年目の新人も多く、教員経験が浅い上、図書の活用方法についても研修だけでは十分にイメージがつかめず、理解度の低さにつながったと推測する。

難民キャンプでは、国際支援の減少に拍車がかかっており、教育分野においても、頻繁な人材の入れ替わり、教員給与の減少といった影響が出ている。実際、事務所のあるメーソットから近いメラ難民キャンプでは、給与の良い職への転職や第三国定住、難民キャンプ外での就労をする人数が他の難民キャンプより多く、教員希望者が少ないため、高校卒業者がすぐに教員になる等、教員の低年齢化が課題となっている。このような課題を持つ難民キャンプに対しては、事業 2 年目の研修では、新しい教員でも理解しやすい実践事例を多く取り入れ、図書を活用する敷居の高さを払拭する内容であることが求められる。

研修から約半年後のモニタリング時に、研修参加者に質問紙調査をした結果、回答した保育所、小学校教員の 98%が研修で習得した知識と技術を学校で活用しており、特にすべての教員(100%)が授業、及び学校内で絵本を利用していた。また、回答した中・高等学校、ポスト高等学校の教員の 90%が研修で習得した知識と技術を学校で活用しており、授業や学校内で学習参考書を利用している教員は 96%に上った。この結果から、研修後、多くの教員が学校で図書を活用している状況があることが分かった。一方で、教員からは、図書の管理の難しさ、学年のレベルにあった図書の配布の必要性(特に中学校)、図書館と学校間での定期的な会議の実施等の課題やリクエストが上がり、これらは事業 2 年目に向けて改善していきたい。

#### 2-2. 学習参考書の提供

学校への貸し出しが可能な学習参考書、6 タイトル 150 冊を 21 図書館へ供与した。またミャンマーからも 1,484 冊を購入し、カレニー系難民キャンプを含む 9 つの難民キャンプへ供与した。

7 ヲ所のカレニー系難民キャンプの 78 人の教員に対して学習参考書のニーズ調査の結果、95%の教員が図書館にはニーズに合致した学習参考書があると回答し、同じく、95%の教員が図書館が学習参考書を適切に管理している回答した。教員からは、カレニー語の図書、各教科の教員用指導書、歴史本、様々なテーマの絵本などがリクエストとして上がった。

#### 2-3. 学校での図書利用手引きの作成

各学校への質問紙配布や教員を対象とした図書館活用研修を通して、120 校の学校、及び、研修に参加した教員から図書活用事例を収集した。その際に実施した質問紙調査からは、授業における図書の活用だけでなく、休み時間や土曜日の補填授業での活用を想定していることが分かった。図書利用手引きの作成については、事業 2 年目に実施する。

#### 2-4. 学校図書室設備改善

カレニー系難民キャンプ内の 28 校の学校で、学校図書室の設備改善活動を実施した(メラ 7 校、ウンピナム 8 校、ヌポ 3 校、メラマルアン 7 校、メラウ 2 校、タムヒン 1 校)。設備改善に当たっては、事前に各学校の図書室を調査した上で改善対象となる学校を選定し、

本棚や机といった家具の製作や図書の配架等を行った。  
設備改善を行った 28 校の図書館の図書状況、スペース、本棚、ポスター/写真/室内装飾、清掃状況について、年度末に観察調査した結果、86%の学校で十分に整備されていることを確認した。また、図書の管理については、図書の清掃、展示状況は、86%の学校で問題がなかったが、図書の登録、分類が行われている図書館は半分に満たず、学生への図書の貸出をしている学校は 64%に限られていた。その理由としては、まだ図書数が少ないために、図書の登録や分類などの管理方法を導入しなくてもある程度管理が可能なこと、また、小学校を中心に図書室設備の改善を実施したため、図書の紛失や損傷の可能性を考慮し、低年齢の小学生を対象にした貸出を控える学校があったことが挙げられる。

学校図書室改善後の変化について、学校の教員に聞き取り調査を実施したところ、子どもたちの読書に対する関心が高まった、教員が授業で図書を利用しやすくなった、教員の不在時にも時間を無駄にせず、学生が図書室で本を読むようになった、学生が積極的に自主学習に取り組みようになった等の回答を得た。一方で、図書の管理が容易ではない、図書の言語の見直しが必要、読書スペースが限られているなど、改善が必要な点についても言及があり、これらの課題については、事業 2 年次にフォローアップをする予定である。

上記の活動を通して、学校における学習参考書の活用環境が改善され、学生や教員が学習において図書を利用しやすい環境が整った。これは、SDGs のターゲット 4-1 にある初等教育及び中等教育における、効果的な学習成果をもたらす質の高い教育に寄与し、さらに、保育所における図書活用の実績から、4-2 における就学前教育にも貢献していると言える。

(ウ) コミュニティでの読書推進活動への参加を通して、青年が自主的に活動できる機会が増えている。

### 3-1. 青年ボランティア育成研修会

2016 年 6 月に実施した青年ボランティア育成研修会では、計画された参加者のうち 99%にあたる 167 人が参加した。メラ難民キャンプ、ウンピナム難民キャンプでは約 30 人の青年が参加し、他の 5 つ

の難民キャンプでは約 20 人の青年が参加した。

研修後の質問紙調査では、参加者の 79%が、知識と技術を習得していることが分かった。読み聞かせ、人形劇の手法については参加者の 77%が、手遊び歌 やアイスブレイキングについては 83%が知識・技術を習得しており、いずれも指標である 70%を満たすことができた。また同上の質問紙によると、研修後、参加者の 80%が青年ボランティアとしての役割や責任について認識していることが分かった。活動に必要な知識や技術だけでなく、人前で活動を先導する自信がついたという回答も多く得られた。

### 3-2. 青年ボランティアによるイベントを通じた読書推進活動

育成研修会で修得した知識、技術をもとに、青年ボランティアによる様々な読書推進活動が行われ、2016 年 6～7 月、9～10 月（年 2 回）には、学校等で人形劇を含めたキャラバン公演と呼ばれるおはなし会が実施され、7 か所の難民キャンプ合計で 10,607 人の子どもたちが参加した。また、2016 年 11 月 22 日には、難民子ども文化祭がウンピラム難民キャンプで開催され、図書館青年ボランティアが文化祭の運営、実施の中心的な役割を担った。このイベントには、カレン、カチン、チン、パオ、ビルマ、アラカン、モン、ムスリムの 8 民族 160 人の少数民族の子どもたちが参加した。さらに、2016 年 7 月以降、移動図書館を配布した難民キャンプ内地区 70 ヲ所で、青年ボランティアによる週末の読み聞かせ活動を実施し、7 ヲ所の難民キャンプを通して、2017 年 3 月までに延べ 35,772 人の子どもたちが参加した。事業期間内に図書館青年ボランティアが実施した週末の読み聞かせ活動の回数は、メラ 12 地区 150 回、ウンピラム 16 地区 153 回、ヌポ 17 地区 306 回、メラマルアン 5 地区 97 回、メラウ 10 地区 185 回、タムヒン 5 地区 99 回、バンドンヤン 5 地区 126 回となり、1 地区当たり 16 回の実施となった。これらの活動には、研修に参加したすべての青年ボランティア（100%）が携わったが、研修実施後、学業を理由にボランティアの交代もあった。青年ボランティアの多くが高校生であるため、学業や学校行事等との両立が難しい場合もあり、学校の試験期間は活動が少なくなっている。

上記の活動は、青年層の読書推進に関わる知識、技術を増やすと同時に、青年層がリーダーシップを含めた様々なライフスキルを身に着ける機会となっている。これは、SDGs ターゲット 4-4 にある若者

	<p>の技能向上に繋がっている。また、活動を通して、少数民族や障がい者に対しても読書機会の促進をしていることから、ターゲット 4-5 の脆弱層への教育へのアクセスにも貢献した。</p>
(4) 持続発展性	<p>コミュニティ図書館事業の実施に当たり、カレン難民委員会教育部会 (KRCEE)、各難民キャンプ内の教育部会 (OCEE)、図書館委員会と協働しており、将来的に彼らが事業の運営を引き継いでいくことを期待している。</p> <p>現在、事業運営に関わる意思決定については、カウンターパートである KRCEE、特に KRCEE の図書館職員 (Library Officer) との連携・協議の下に行っている。また、難民キャンプ内のコミュニティ図書館の運営や図書館サービスの提供については、図書館委員会、OCEE に所属する図書館担当、図書館員が主導し、当会はアドバイス、資金や物資の提供、技術面でのサポート役を担っている。ただし、難民キャンプによっては、人材の交代があり、現時点で当会職員による積極的なサポートが必要になっているところもある。</p> <p>事業 2 年目、3 年目では、KRCEE、OCEE のコミットメントを強化する他、図書館サービスに関わるマニュアルの更新や、定期的な図書館関係者同士の知識・技術交換会の実施を通して、難民キャンプ内で持続的に質を維持した図書館サービスを提供できる環境を整えていく予定。</p> <p>また、現在、難民帰還の動きがある中で、図書館内にある図書、その他図書館資材については、将来、帰還後に、ミャンマー国内、特にカレン州内で活用されることも想定しており、KRCEE とカレン州内で教育支援を担っているカレン教育部会 (Karen Education Department、KED) と協議の上、具体的な移送・移管計画を策定する予定である。</p>